2010年（平成22年）
第26号
（2月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

「ユース２１京都」設立１０周年記念

１月３１日、京都国際ホテルにて、ユース２１京都設立１０周年記念式典及び祝賀会が、山田京都府知事、門川京都市長をはじめ１００人の参加者を得て開催された。

ユース２１京都とは、京都の１５の青少年団体等が集まって、京都が元気になるようにと、ボランティア活動を行おうとして組織されたグループだ。主な活動として、１月の京都市成人式と２月の車いす駅伝競走大会のボランティアを行っている。

波部理事長（京都府モラロジー）があいさつに立ち、ユース２１京都の経緯について語り、今年度で理事長を退任し、後継を澤村副理事長（立正佼成会）にバトンタッチすることを表明した。

その後、来賓の山田知事や門川市長からの祝辞、ユース２１京都の活動に貢献した企業・団体への感謝状贈呈が行われた。

昭和５８年に発足した京都青少年活動推進会議が、京都市成人式、車いす駅伝、祇園祭鉾曳きの３つの事業を実施、平成９年に発展的に解消し、事業を実施する実行委員会ごとに３つの団体に分かれ、平成１２年京都市成人式と車いす駅伝を実施していた２つの団体が再統合し、ユース２１京都が誕生したという経過がある。

現在の加盟団体は(社)ガールスカウト日本連盟京都府支部、(社)茶道裏千家淡交会総本部青年部、(社)茶道裏千家淡交会青年部連合会、(社)京都青年会議所、京都キリスト教青年会、京都サイクリング協会、京都ニューホビー普及研究会：平安花倶楽部、京都曹洞宗青年会、京都青少年活動ネット、京都府モラロジー協議会青年活動推進委員会、京都府レクリエーション研究会：ねこのて、京都府赤十字ユースボランティア団体連絡協議会、赤十字レスキューチェーン京都、日本ボーイスカウト京都連盟、立正佼成会京都教会青年部。

ハイチ大地震の救援活動へ緊急支援

立正佼成会一食平和基金運営委員会はハイチ南部を震源地として１月１２日に発生した地震の被害に対し、下記の通り緊急支援を行った。

○ジェン　７００万円
○慈済基金会　５００万円
○ＷＦＰ（国連世界食糧計画）　７００万円
○ＮＰＯ法人「ＡＭＤＡ」　３５０万円

総額２２５０万円が充てられることになった。特に被害の大きかった同国南部では、ライフラインが断絶した上、倒壊した建物によって道路が封鎖されるなど、各地で救援活動が難航するとともに、深刻な食糧不足も続いている。加えて、同国は政情不安の影響で貧困などの社会問題を抱えており、今回の地震による混乱で急速に治安が悪化している。ＷＦＰは今後、近隣国から高カロリービスケットを輸送して被災者に配布するなどの食糧支援を実施。ＡＭＤＡは現地の医療ニーズを調査後、地震により負傷した人々の外科治療などを行うことになった。

２月５日現在、犠牲者が２１万２０００人、自宅などを失った被災者は１００万人以上に達している。

時事刻々

「チェンジとは　言ってたことを　変えること！」サラリーマン川柳に投稿された一句だ。川柳は自由な表現により世の中をおもしろ・おかしく風刺している。

現在投稿されている作品には、「向上心　景気とともに　下降気味」「不景気で　就活あきらめ　婚活へ」など景気低迷の影響を受けたものが垣間見られる。

なかなか思い通りにならないことが多い中、こうした表現がうさばらしになるのもいいかもしれない。一人で思い込むのでなく、表に出せばストレスも溜まらないだろう。

孤独死が問題になって久しい、最近は無縁社会という言葉も流行しだした。人は一人では生きていけない。人と人との絆を大事にしていきたいものだ。

中でも家族は大切だ。「老夫婦　会話はずむが…　かみ合わず」となっても、会話はかかせないようにしたい。

ブロック！地球温暖化－エコキャップ運動

『地球に愛を　子どもに愛を』をメインテーマに２００７年に始まったこのエコキャップ回収運動は日本各地の個人や団体、３万件がすでに登録され、２０１０年１月末現在のキャップ回収累計は１１億個も集まった。立正佼成会でも本部をはじめ様々な教会ですでに取り組みがなされている。一教会で９０万個も集めた教会もある。もちろん数を競う運動ではないが、一人ひとりの思いがこもった回収されたペットボトルのキャップが確実に世界の子どもたちへワクチンとなって届けられ、そしてペットボトルのリサイクルに役立つ。

１階喫煙場所横に設置された回収ボックス

京都教会においてもエコキャップ回収を開始する準備が整った。左の写真がその回収ボックスだ。ペットボトルは様々な飲料品や調味料などに使用されている。例えば、炭酸飲料・清涼飲料・お茶・コーヒーなど、そして焼酎などのアルコール飲料や醤油・ソース・本みりん・サラダ油などもある。

ペットボトルのキャップであれば大きさは問わない。家庭などで使用されたペットボトルのキャップを集めるだけの運動。注意事項として、キャップは必ず洗浄することと、値札などのシール類や金属類は取り外すこと。

こうして集まったキャップは京都市内にあるエコキャップ推進運動の協力リサイクル業者へ月一回程度のペースで持ち込み、その回収個数によって、ワクチンが世界の子供たちに提供される。

報告　全国教育者研究大会開催される

京都教育者教育研究所

１月３０日（土）・３１日（日）、立正佼成会本部の普門館で「全国教育者研究大会」が開催されました。主催の教育者教育研究所は、昭和４３年４月に設立され、『教師自身が変われば、生徒が変わる』をモットーに、教師自らが人格向上をはかり、現場での実践を通して自己を高め、人間性尊重の教育の実践を目標として掲げています。今年も全国から保育園・幼稚園・小中高校・大学/専門学校・特別支援・塾など教育活動に携わる方々が集まりました。

３０日は株式会社イエローハットの相談役の鍵山秀三郎氏より「ひとつ拾えば、ひとつだけきれいになる」というテーマで記念講演がありました。創業時から続けている掃除について、「凡事徹底」つまり「誰にでもできる平凡なことを誰にもできないくらい徹底して続けてきた」と語っておられました。そして、掃除をすると謙虚な姿勢が身につき、感動、感謝の気持ちにあふれ、心が磨かれるということでした。

３１日の渡邊恭位氏（立正佼成会理事長）の講話では、仏教の成り立ちや歴史の話から、「相手の状況や悩み、レベルに応じて教えを説いた釈尊こそ理想の教育者」であることを学びました。教えを説くにあたっての具体的な話し方は、①理論的に話す（法説）、②たとえ話で説明する（譬説）、③体験談で説明する（因縁説）であるということです［三周の説法］。教育の場では、一人ひとり個性の異なる子ども達をきちんと理解した上で、ふさわしい方法で伝えていくことが大事であると語られました。最後に、教師の理想像は、実践の普賢菩薩であるとして、教師が人格的な魅力を持ちモデルとなり、相手の長所を引き出し、相手を認めることができる人になることの大切さを示してくださいました。

私は今年で５回目の参加でしたが、「全国教育者研究大会」は、貴重な学びの機会であり、そして日々頑張っておられる先生方との出会いもあり、毎年楽しみにしています。ぜひ一人でも多くの教育者の方に参加していただきたいです。（宇津亜紀）

他教団活動紹介

（中外日報２月９日より）

●大本、開教１１８年祝う節分大祭

大本（出口紅教主）は３日から４日にかけて、開教１１８年を祝う節分大祭の祭典・諸行事を綾部市の教団聖地・梅松苑で執り行った。全国の信徒や地元市民ら１万人が参拝。世界の邪気を祓い清める「大祓の神事」が夜を徹して行われ、人群万類の平安と幸福を祈った。大祭祭典に先立ち、出口教主と松田行彦本部長が挨拶に立った。

私たちkinki.元気　～豊中教会より～

２月４日の開祖さまご命日式典終了後に、ＩＴ委員からブログの推進ＰＲをさせて頂きました。
始めに、ＩＴ責任者のＹ壮年さんより簡単な主旨説明のあと、スライドにて近畿ブロックのホームページが立ち上げられた経緯やねらいなどを説明、その後各部署のＩＴ委員の紹介と豊中教会で過去に掲載された原稿を見て頂きました。－詳しくは下記アドレスまで。
http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/toyonaka/

今年は「万物変化の年」

２月３日の節分の日から半月間、京都教会では、九星に基づく「今年の運勢」を配布しています。立春から気が変わるので、この変わり目に一年の心構えを考えてもらいたいと続けている年中行事です。

配布された「今年の運勢」では、「今年は八白土星の年で『万物の変化』の年です。『変わり目』であると同時に、『つながり』となります。昨年からの『変化』が継続され、来年に引き継がれます」と一年の特徴をまとめています。

今年は変化の年だということで、先が見えないという不安が広まるとも言われています。だからこそ「人の絆」が大事です。また、変化するということは未来に希望を持てることだとも受け取れます。そこで、今年は気持ちを切り替えていくことも必要です。

ということで、今年は「人間関係を深め、心機一転の気構えを持つ」ことを大切にしたい１年です。

参拝者は自分や家族のために、本命星を確認してそれぞれの九星の運勢を持ち帰り、一年の指針として家族の話題にしてもらっていました。

佼成のことば（行法ガイドブックより）

●させていただく

人間はともすれば自分の行為を「自分がするんだ」と思いがちです。それは我にとらわれた考えです。すべての生き物は久遠の本仏に生かされているのですから、私たちの行為はもともと仏さまの力によるものです。とりわけ、人に法を伝える時や、日常いろいろなことをして差し上げる時などには、相手より一段高い立場に立って「してやる」という驕り高ぶった気持ちになりがちです。しかし、それでは相手も喜んで受けてくれません。一歩下がって「仏さまのお力によってさせていただく」と考えるのが仏教者の姿勢です。『勧持品』でも弟子たちが釈尊の滅後にあまねく法を説くことをお誓いしたあとに「皆是れ仏の威力ならん」と申し上げています。このように自分の心を空しくして、仏さまの教えを信じ、仏さまの願いを自分の願いとして素直に受け入れていくことが私たちの信仰です。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

【一点の明かり窓・・・仏性礼拝】

私たちはみんなが同じ命を持った、仏さまの子どもです。能力や個性など、表面には様々な違いはあるけれども、仏さまの子どもであり、仏性を持って生かされているという点ではみんな平等です。

表面の違いを乗り越えて、その人の仏性を見ることができるかどうか、**「一点の明かり窓」**が見えるかどうか。庭野開祖の願いはそこなのです。思い通りにならない人、言うことを聞いてくれない人、難しい人に接すると苦労します。けれども、苦労するから自分がよく分かり、成長できるのです。

ですから、私たちはまず「一点の明かり窓」を見つけることから始めるのです。庭野開祖は**「私たちは、毎日仏さまに出遭っているんですよ。色んな方に、仏さまとしての仏性があり、自分にもまた仏性がある。ですから、その仏性と仏性でふれあっていけば、相手がどんな方でも仏さまのように見えて、拝ませてもらえるんです」**と、おっしゃっています。

出会う人、出会う人に、「この方は、仏さまの遣わされた方だ」と思って合掌していけば、常不軽菩薩の但行礼拝(たんぎょうらいはい)になるのです。それを庭野開祖は、どのように実践されたのでしょう。WCRP VI(第六回世界宗教者平和会議)の事前会議でのことです。

資料に手違いがあったことがきっかけで議論が紛糾し、会議場内に緊張した空気が張り詰めました。その時、庭野開祖は手を挙げ、こう話されたのでした。「本日は貴重な資料の下、熱心なご討議、誠に有難うございます。実は、私は目が悪くなり、資料も十分には読めません。耳も弱くなり、皆さんの議論にも十分についていけないほどです。**しかし、こんな私でもよろしければ、皆さまのお役に立てることがございましたら、何なりとこの私にお申し付け下さい**」

会議が混乱したことを叱責するのではなく、また誰かを責めることもなく、その場にいる全員を拝み、深々と頭を下げる庭野開祖の姿に、会場の空気は一転し、前向きな議論が進められました。常不軽菩薩品に「世世に仏に値いたてまつりて疾く仏道を成ぜん」とあるように、私たちは、**毎日出会う人を仏さまと見ることで、幸せになれ、仏になれるのです。**

すべての人が仏の子なら、私が出会う人は、みんな仏さまです。そう思って尊敬していく心が仏道です。相手を尊敬できると、それは温かい言葉になり、思いやりの行いになります。反対に言えば、温かい言葉をかけ、思いやりの行いをしている人がいたら、その人は仏性を礼拝している人だと言えるのではないでしょうか。常不軽菩薩の礼拝行は、自分も相手も仏になれる行なのです。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《ボートピープルの救援》

プロジェクトチームは、国連難民高等弁務官事務所クアラルンプール駐在代表、在シンガポールのフランス大使、アメリカ大使館の書記官などと相談をしながら、具体的な救済策を練り、年が明けると、すぐにマレーシア沖での難民収容が始まった。余談になるが、そのチャーター船の中で女の子が生まれた。船名のローランド号にちなんで、生まれてきた赤ちゃんに「ローランド」という名前がつけられた。

ボート生活をしている難民に小型の船で食料、水、医薬品を配ってまわる。そうしている間に、適当な国から上陸許可を取り付けようという計画だった。ところが、このニュースがボイス・オブ・アメリカの電波で流されると、携帯ラジオでそれを聞いたマレーシアのキャンプの難民までもが、収容所から抜け出して船に泳いでくるという事態になってしまった。しかも、どこの国からも上陸許可がとれないのだ。

ACRP(アジア宗教者平和会議)事務総長をはじめ、プロジェクトのメンバーが現地に赴いて対策に腐心したが、二ヶ月余りが経過しても解決しない。国連難民高等弁務官事務所も頭をかかえる始末だった。「チャーター船で難民をハワイまで連れて行ってはどうか」「いや、船底が浅いから太平洋を渡ることはできない」「それなら、オーストラリアに行って、夜陰に乗じて上陸する案はどうだ。上陸してしまえば、広いオーストラリアなら拒むわけにもいかんだろう」本当に、そんな会話が繰り返されたのである。

そのうちに、「国際政治を知らない宗教者の勇み足」といった報道もあらわれ始めた。大型船二隻のチャーター料は日ごとにかさんでいくし、あまり同情的でない報道が耳に入ると、さすがに不安になることがあった。**だが、このアジアの宗教者たちの懸命な努力を、世界の宗教者がバックアップしてくれたのである。**

大型船のバックアップ料や難民の食料費など、一日に四十万円もかかるその費用を、世界宗教者平和会議のメンバーがそれぞれの国に働きかけて、三十万ドルの資金が寄せられた。そして、その数ヶ月間にわたる救援活動で、五百三十人の難民を救助することが出来たのだった。この救援活動で得たいちばんの収穫は、**「世界の宗教者が正しい目的を持ってひたむきに協力しあえば、必ず世界は動く」という確信であった。**

やがて、米国、フランス、オーストラリア、カナダなどの国が難民受け入れを決め、この宗教者の行動が世界の世論を喚起して、国連も難民問題に本腰を入れて取り組むことになったのだった。のちにワルトハイム国連事務総長から、**「宗教者の皆さんがボートピープル救援に着手された当時は、時期尚早の感がありましたが、それによって世界の世論に先鞭をつけて下さったことに、心から感謝しております」**とお礼の言葉を頂いたのだった。

国連難民高等弁務官事務所の保護のもとに置かれた難民が、これからどこの国で、どう生計を立てていくか。その新天地を見つけるまでの間の受け入れを、日本では日本赤十字社、カリタスジャパン、天理教が行っていたが、立正佼成会も五十二年から会の二ヶ所(千葉県の小湊と福井県の高浜)の施設を提供して、面倒を見させてもらうことになった。

そのころ、日本におけるベトナム難民は七百人を越えるまでになっていた。日本の小学校に通っていた子供たちの中に、定住の地が決まっても「日本を離れるのはいやだ」と泣いて別れを惜しむ子供も出てくるようになった。当時、次々に日本にやってくるボートピープルの収容に苦慮した日本政府から、「もっと受け入れを」と言われるのだが、なかなか施設が見つからない。

そこで全国のお寺や教団に、ぜひ面倒を見ていただきたい旨の要請状を出したが、**そうした中で、お一人の僧侶の方が「何も出来ずに申し訳ない」というお手紙と一緒にご芳志をお送り下さったのと、救世軍がボートピープルを一年間引き受けて下さったのが、何よりの救いだったのを覚えている。**

(つづく)

渉外部からのメッセージ

先月号でふれた「ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ！」は今年９月２５日までの署名運動ですが、今年に入って早くも１ヶ月が過ぎました。何も取り組めていない自分に焦りすら感じます。まずその目的をしっかり把握すること。「全世界の軍事費の１０％を削減し、その削減分を国連ミレニアム開発目標の遂行に充てることを国際社会や各国政府に呼びかける」ことです。人事ではなく自分なら何が出来るか、主体的に取り組みたいです。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266